The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	咸陽宮絵巻（翻刻）
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1993, 60, p. 37-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68856
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

咸陽宮絵巻（翻刻）

伊井春樹

翻刻した専修寺蔵「咸陽宮」は巻子本二軸、桐箱に収められ、蓋には中央に大きく打ち付け書きで「感陽宮之絵　弐巻」と墨書する。また、蓋右上には、朱筆で「十四」、右下には墨筆で「二百八十五」とする、それぞれ付箋が押される。軸に貼付された題簽紙は朱地、それに金泥、金砂子で雲霞、草花描、それに「かんやう宮　上（下）」と記す。天地三二・一センチ、表紙は金襴緞子、格子縞に笹等の文を繋ぐ模様。見返しは金箔布目。本文料紙は、鳥の子、それに金泥で松、小屋、草花等を下絵として描く。挿絵は、上下巻各六図。

翻字については、原則として本文通りの行数、かなづかい、用字とした。ただし、挿絵については横に長くなりすぎるため、一場面一カットとし、中心となる場面を示し、左右を省略せざるを得なかった。

かんやう宮　上

むかし大こくにかんやう宮と申ていかめしき大里侍けりこれはしんのかうこうと

申人のはしめてつくり給ひし宮こなりゐすいのきたきうそうさんのみなみにありしゆへにかんやう宮とは申とかやひかしにはかんこくくはんとてけはしきたにをようかいとしみなみにはかうさんとてかゝたる山ありそれすなはちてんふの地なりよつてこのところにみやこをつくり天下のゆうしふんしやをまねきあつめはかりことをめくらしまつりことをあらためくにをとましたみをさかやかし六こくをほろほして天下をうはゝんとそたくまれけるそも〳〵上古のいにしへは世すなほにたみあつかりしうへせいしんよに出て君となりしんとなりいつくしみをふかくしめくみをひろくして世をまもりたみをあいし給ひしかはをのつからてんかこくかとこしなへにやすかりきしかるに

しうの代すくにかたふかんとせしころより
やうやくふんたうおとろへしよこうをの〳〵
ゐをもつはらとしてたかひにさいしうの
心をふくんてくにをあらそひ世をはかりし
かはていわうの御まつりことたえはてたり
このゆへにせいのくはんこうしんのふんこう
なといふはわう出きて天下のけんへい
をとりしかはしうのみかとにてうするしよこ
うはなかりけりよつてつゐにしんわうかん
わうきわうそわうえんわうてうわうせ
いわうかんくわをうこかしふたうをもつ
はらとしてせはきくに〳〵をうちとりける
ほとに天下を七つにわけてその七わ
うしてたもてる七みかと、申はこれなり
せんこくの七ゆうと申もこれなりこの
時まてもしうのみかとはわつかにしう
のくに一しよをまもりておはします七
わうはたかひにかいしんをさしはさみ
六こくをほろほし天下をたいらけ四
かいをへいとんせんとおもはれけれはを
の〳〵たかひにおそれをなしけいめい
をしていつはりなからんことをしめされ
けりくわいめいといふことはしよわうた
かひにいてあひてせいてうをなした
まふよしなり

（挿絵第一図）

こゝにしんわうしやうくんかはかりことを
もつてつゐにいくさをおこしひかしの
かたにうち入てそこくの地をやふり千
里にあまりてきりとりけりこれによ
つて六こくのしよわうおそりおそれて
しきりにくわいめいしてしんをよはま
さんことをあひはかり給ふ是かために
ちんきてうほうをなけうち天下のち
しんをもとめゆうしをまねき侍るほとに
ねいえつしよしやうそしんとくなと云
ちほうのたつしやあつまりて日夜心さ
しをはけましはかりことをつくしつゝ
つゐにこしそんしたいたけいりやう
なといふ名しやうに百万きのつはもの
をあひそへへいけんくんしゆしんくん
しんれうくんまうしやうくんこの四君を
大将としてしんのくにをほろほさん
ためにかんやう宮にそおもむきけるしん
わうこのよしを聞給てはつきもうてん
なといふしやうくんに五十万きのつはも
のをあひそへかんこくの関をひらきて
六こくのいくさをまねき入ふせきたゝ

かはしむる所にしんのいくさつよくして
六こくのた、かひやふれしかはうちほろ
ほさる、事かすをしらすち大河をなかし
てたくをた、よはしかはねはかうかくと
なつて行かよふみちもなしさる程に六国
のしよこういきほひすくにつきしかは
かさねてた、かはんちからなかりけり

（挿絵第二図）

あるひはほこをふせ手をつかね下臣と
せうしてしんにかうさんしあるひは地を
あたへ身かはりを出してそのなんをまぬ
かる、もありけりこれによつてしんわ
うゐせいいよ〳〵つよくなりはしよく
のかためをやふりかうゆの地をさきと
つてつゐにしうのみかとをかたふけた
てまつるほうき九ていをうはひとつて
四かいをへいとんし侍りきさてしくはう
ていの御時に天下を三十六くんにさた
めかんやうきうをおひた、しくひろ
けてたかさ三里の山をつきあけ
そのうへに大りをつくりてめくり九千
里にはあか、ねのついちをつきかん
もんをひらかれたりしくはうていのおはしま
す御てんはあはう宮と申て東西五百
けんなんほく五町たかさ二十ちやう
なれはやへたつ雲のうへなるへしそれ
よりきんもんまては三百里ありその
間にいすいといふ川なかれたり三百里
の間にはふたうと申てたかさ十ちやう
のらうかをつくり、けとうさいにす百
のくうてんをたてならへたりそのきれ
いしやうこんはいつれもをろそかならす玉
のいらかこかねのうつはりしろかねをも
つてたる木としあか、ねをもつては
しらとすにはにはしんしゆのいさこを
まき戸ほそは七ほうをちりはめた
りこれよりきたのかたにあたつてこ
うくと申てえひすのこはきくにあり
しくはうていやかてもうてんをつかはして
こひとを千里のほかにおひしりそけ
永代あんらくのためにとて一万里の
間にいしかきをして胡人をふせくよ
うかいとすそも〳〵しくはうていと申は
せんきよくのみかとのこうゐんなりしん
のかうこうには七代のそんさうしやうわ
うの太子なりそのゐせいこ、んにすく
れ給しかは四かいひとしくなひきおもん
したてまつる事まつたいにもありかた

かるへしこゝにおゐてしくはうの御こゝろ
おこり〳〵して今よりのち万世にをよふ
までわか御子孫とこしなへに天下をた
もち給ふへしされは世中にかんくわを
うこかす事あるへからす宮門けいこのふし
のほかはひやうくをもつことむやくなりとて
天下をこと〳〵くかりてあらゆる所のふ
くをあつめらるやかてそのあかゝねをも
つて金人十二人つくりてゆうきんもんを
たてをかれけりいにしへ大こくにはほこ
つるきをもあかゝねにてつくりしとなり
その金人一つのおもさ千石なりとそ
聞えし

（挿絵第三図）

さてもせいのまうしやうくんえんの太
子たんなといふ人ひとしちとなつてしん
にとらはれ侍しかまうしやうくんはいかに
もして今一たひほんいをとけはやと思ひ
つゝにはとりのなくまねをしてかんこく
のせきをたはかりとをつてつゐに本
こくににけかへりけりされとも太したん
はいまたしんにとらはれをかれてあけ
くれろうてうの雲をそふるうれへにし
つみかなしみ侍しかある時申されけるは
四かい一とうして君をおもんしたてまつる
うへはなにのあやふみか侍るへきわれに
しはしのいとまを給はれかしこきやうに
かへりらうほをいま一たひあひみたてまつ
らはやとそなけかれけるけいこの官人ら
そのよしをしくはうていへそうもんしけれは
みかとあさわつてのたまはくえんたん
われにいしゆをのこしてたはかるにこそ
まことにこまにつのおひからすのかしら
のしろくならんときあらはえんたんを
ほんこくにかへすへしとその給ひける
太しそのよしき、給て大きにたんそく
しあふきねかはくはあはれみをたれ馬
につのおひからすのかしらしろくなつ
てわれをいま一たひほんこくにかへし
てらうほにあはさしめ給へとかんたん
をくたきつゝ天神地きをいのり給ふ
まことにほんてんたいしやくもかう〳〵
のこゝろさしをかんし給ふにや馬につの
おひてきんていにいなゝきかしらの白
きからすきうけつをとひかけりけれは
しくはうこのよし御らんしてりんけんあせ
のことしくんしにたはふれのことはなしと
てやかてえんたんかつみをゆるされ三

とせのいとまを給はつてほんこくへかへし
給ひける太子おほきによろこんてこ
きやうのかたへいそかせ給ふしくはうはな
をもいしゆふかくえんたんはほんこくに
かへしやらしとおほしめしえんのくにへ
ゆくみちにせんかといふ大河ありかの川に
そきやうといふ長きはしのありけるをさ
きたつて人をつかはしはしいたをふめは
はつるゝやうにあやつりてたいしを河
水におとしいるへきやうにそせられける
さるほとに太子かしこにいたつてはし
をわたり給ふとき官人らあやまつて橋
いたをふみはつし太子を河中におとし
入たりけりされとも太しはみつにも
しつみ給はすへいちをあゆむかことく
にしてむかひのきしにいたりつきて河
とをみかへり見たまへは大きなるかめと
もかかうをならへてわたしけるこそふし
きなれこれはそのかみ太しのちゝえん
わうしんけいをほとこしおほくのかめ
ともをたすけられしかそのはうおん
をほうし侍る成へし

（挿絵第四図）

日かすつもり〳〵てほんこくにかへり
つき給しかはらうほをはしめてきやうた
いしんるいまいりあつまりいさみよろ
こひ侍るもことはりなりらうほなく〳〵
のたまひけるはわれかやうにおいおとろへ
あすをもしらぬありさまなれはこの世
にて太子にあひみんことかなふましと
あけくれ思ひなけきしに角馬白烏
のきすいあつてたゝ今思ひまうけぬ
たいめんをとけ侍る事よろこひても
あまりあるへしてうるいちくるいたに
もあはれみをなしなさけをほとこし
ぬ人りんとしてそのおんをほうせさら
むやとてからすともにゑをまきちらし
てあたへ給へはその中にかしらのしろ
きからす馬につのゝおひたるあひまし
はりてゑをはみけるこそふしきなれ
こゝに又けいかと申てたけきつはもの
ありけりもとはせいのくにのものなりし
かえんわうのしんとくなるよしを聞て
まいりつかへたりかれ又ちしんゆうの三
とくをかねたるものなれはすなはち大臣
のくらゐにはいし給へり太子けいかをめ
しての給ひけるはわれしんのとらはれと
なつてきうこんにくるしむ事六か年か

のうらみこつすいにてつしてしのひかたし
一たひふしきのきすいをもつてつみを
まぬかるといへともつゐにはこしうのなん
をのかるへからすされはいかにもしてしんを
よはますへしやとの給へはけいかこのよし
うけ給はりおほせのことく御いきとをり
よきなしといへともつら〳〵しんの有さま
をみるに四かいをたな心のうちに、きりて
ゐせいを一天にか、やかせるえんはそのつか
さとる事百ふん一にもをよはすしていき
ほひ又おとろへたりまさにえんのすこし
きちからをもつてしんのかうてきをおひ
やかさんことかなふへからさるかしはらく時を
まちてはかりことをめくらさるへしと
そ申ける

（挿絵第五図）

か、りける所にしくはうていよりみことのり
を下さる、事ありあやしやなに事ならん
とみな〳〵おとろき給へはえんのくにの
さしつならひにはんえきかくひをはねて
いそきていとにちさんすへしと也はん
ゐきといふものはしくはうていの臣下也
ほうを、かしたる事ありけるかあまりに
しんのはつときふけれはしそくのつみを
おそれてえんのくにをたのみてきたり
てしのひかくれて侍しをしくはうき、
をよひ給てか、るせんしをなし給ふ成へし
太子このよしきこしめし我をたのみてま
いりたるものをあへなくちうせん事み
れんなるへしいか、すへきとててんくはう
せんせいといふらう臣をめしてとひ給へは
せんせいしはらくしあんして申やうはん
ゐきすてに一天の君の御てきとして
かくのことくせんしをくたし給ふうへは四かい
の間に身をかくしをく事かなふへからす
臣つら〳〵はかりみるにかのくひをうつて
一つのはこにおさめはこのそこにけんをか
くし入さうしをしてさ、けしめ奉らはしくはう
はたけきみかとなれはすなはち出てたい
めんし給ふへしその時はかりたてまつるへし
と申せは太子このよしきこしめしこれこそ
しかるへきはかりことなれさらはなんちを
たのみ給ふへしとの給へはてんくはうか
いはくきりん一あしに千里をかける
といへともおいぬれはとはにもおとる
といへりわれわかくさかんなりし時は身つ
よく心たけかりしかともとし老侍れは
きりよくもともにおとろへてしんたい

心にまかせすいかんとしてたのまれた
てまつるへしやとししけれは太子よし
ちからなしかまへてこの事をひろうする
なとのたまへはてんくはう大にはちてこ
の事もし世にもれ聞えなはわれをうた
かひ給ふへししよせんしをいたきよく
して太しの御こゝろをやすめたてまつら
むにはしかしとてていせんのすもゝの
木にてかうへをうちくたき
しさつしけるこそ
ゆゝしけれ
太子このよし御らんして
なけきかなしみ
給へともかひ
なし

（挿絵第六図）

さて太子たんけいかをめしてその事
をくはしくかたり給へはさうなくりやう
てう申てけりやかてはんえきかしゆ
くしよにいたりてたいめんし申けるは
しくはうていより御へんのくひをとり
てたてまつるへきよしせんしによつて
太子のおほしめしたつ事ありいかんかす
へきとありけれははんゑき聞て大き
によろこひわれふせうの身をもつて
いかてかしくはうにちかつき奉りあたをほ
うすへきや生前のめんほくかゝるおほせ
をかうふるこそさいはひなれといひて
やかてつるきをぬきわれとわかくひを
かきおとしけいかにそ渡しけるあはれ
にたけきありさまなるへし

（挿絵第七図）

かんやう宮　下
さるほとにけいかははんゑきかくひ
もたせてかへりけり太子にさゝけた
てまつりけり太子大きにかんし給
てさらはいそきかんやう宮にちさん
せよとてしゆのはこにそおさめられける
つきにえんのくにのさしつをうつしたる
ほうていをは玉のはこにおさめ同し
くけんけいをあひそへそのしたに
せんひつといふつるきをかくし入られ
たりさてさんたいにをよんてさしつ
のはこをはけいかちさんすへしくひの
はこをはしんふやうさゝけもつへし此
しんふやうはたけきつはものなりゑめ

るかほはせをみてはえいしもなつき
いたかれいかれるおもてを見てはさうし
もおそれをの、くなれは此二人ほんまうを
とくへき事あんのうちなるへしと太子ふ
かくたのまれしもことはりとそ聞えしさる
ほとにけいかしんふやうは吉日えらひかと
出してりよかうのみちにそおもむきける
しかうしてのち天へんあり白こう日
をつらぬけともとをらすと也太子このよし
御らんしてさてはこんとのむほんほいを
とくましきにやと心もとなくそ思はれける
けいかすてにゑきすいといふところにつ
きてりよしゆくしけるにかうせんりと
いふことのめいしんなこりをおしみてこの
所まてともに来りよもすからさけのみ
物かたりしことを引てなくさめけるかか
うせんりなく〳〵
　風せう〳〵としてゑいすいさむしさうし
一たひさつて又かへらしとうたひつゝ夜明し
かはたかひに名こりをおしみゆきわかれ
にけり又ゑつりよといふものはけいかに
あひしたかひしんわうにいるへきにてこの
所まてきたりしか夜もすからふえをふ
きけるかそのふえの音ひやうてうにのみ
ひゝきけりえつりよひそかにけいかに
かたりていはくしくはうていはかねしやうの
人と聞えたり時また秋なれはかねをつか
さとるへししかるに今宵よすから吹ふえ
のひやうてうにのみひゝきけるこそあやし
けれひやうてうはかねのくらゐなりし
くはうにはたすけおほく侍れはこんと
のむほんとけ給ふ事かたかるへしのち
にはかならす思ひしり給ふへしとてやかて
ゑきすいに身をなけてつゐにはかな
くなりにけりけいかしんふやうこのよし
を見てあはれにあさましくは思ひし
かとも思ひとゝまるへきみちならねはたけ
くいさむこゝろにたよりとして
　たひのみちにそいそき
　　ける

（挿絵第八図）

えんのくにといふ所はしんたんこくの東
北のかたけいたんこくのさかひなりかん
やう宮までは三千里にあまれるみちの
ほとなれははる〳〵のたひのそら山とをふ
しては雲かうかくのあとをうつみ松さむ
ふしては風りよしんのゆめをやふりつゝ
あかしくらしてゆくほとに野くれ山くれ

さとくれて名にのみきゝ、ししんのくに
かんやう宮にそつきにける宮城のめく
り一万八千三百八十よ里とかや申せは
みやこのうちにいりても日かすはなをも
かさねけりたいりはたかき三里のうへに
あれはかすみをわけ雲をよちてその
ほるへしさるほとにえんのつかひけいか
しんふやうはんゑきかくひをさゝけて
さんたいするよしそうもんしけれはしくは
うはこれにたいめんあらんためにりんし
のせちゑを、こなはれあはうてんにしゆ
つきよなる大しんけいしやう万官左右
にいねうしれい人かくをそうすしこくに
をよんてえんのつかひをきん中にめ
さる両使をの〳〵はこをさゝけてあは
うてんにのほるたかき三十しやうの玉
のきさはしをのほるときけいかはさき
にす、めともしんふやうはあしふるひわ
な、きてあゆみかねたりけいこの官人
らこのよしを見てないしんにやしんを
ふくむときはけしきほかにあらはるとい へ
りくんしはけいしんにちかつかすとてしん
ふやうをと、めたりその時けいかちんし
ていはくせきれきになしつてきよく
えんをうか、はさるはりれうのわたかまる
所をしらすといへりしんふやうえんのく
にのいやしきへんとにむまれそたつて
いまたかくのことくいかめしくうるはしき所
をはみ、にもきかさりしところに今はし
めてめに見身にふる、によつてこ、ろお
くしつ、あゆみわつらふものなるへしと申
せは官人けにもとてとをしけり

（挿絵第九図）

こらうのなんをのかれてあはうてんに
のほりつきぬくはうていはうんりうかく
の玉座におはします百くはんせんこ万
人さうにいねうすけいかしんふやうしつ
かうとんしゆして二のはこを御まへにさ
しをきひらきつ、千しう万せいとかし
奉るしくはう御心よけにてみ給へはさし
つのしたにこほりのことくなるつるきの
ひかりひや、かにみえしかはみかと大にお
とろかせ給て立さらんとし給ふをけい
かしんふやうすきまもなくとひか、り
みかとのさうの御てにとりつきつる
きを御むねにさしあてけいかいかつて
申やう太子たんとしころとりこめられ
るいせつのくるしみにあひ侍るいこんつ

ゐにさんしかたしよつてそのあたをほ
うせんために臣らをつかはし給へりいまは
しこくうつし侍るへからすとてすてにさし
奉らんとす千万人のちしんまうしやう
なみゐ侍るといへともいかんともすへき
やうなしかいかにはつはものともひやうくを
たいしてなみゐ侍しかとも殿上にはひやう
くをもつことかたくきんせいなりしかは
大臣もけいしやうもむなしき手をあけて
あはてさはくはかりなりしくはうの給ひけるは
我まうほんゆふふのとくをもつて天下を
うちしたかへ四かいを手にゝきるといへとも
うんめいすてにつきぬれはなんちらか手
にかゝつてかいせられん事ちからをよはす
さりなからしはしのいとまをえさせよちん
かてうあいのきさきありその后のきんの
音をさいこにいま一と聞侍らはやとの給へ
はともかくもとゆるし奉るしくはう大きに
よろこひ給てくわやうふ人をめされしかは
ひやうふひとへのあなたなる木丁の
うちにきさきはいてさせ給ひてきん
をそひかせ給ひけるそも〳〵このくわや
うふにんと申は三千人のきさきの中
に第一のひしんにておはしますてんかに
ならひなきことのしやうすなれはとふ鳥
も地におち水魚もおとりいつるほとの
つま手を出し給ふにましてやいまはの
玉のをそとさこそは
ひゝきよくもつくさるら
めとしよ人みゝ
をそそはたて
ける

（挿絵第十図）

ひきよくさま〳〵おほき中にくはんふ
らくといふきよくをひき給ふこそや
さしけれ是はたけきものゝふの心を
やはらけんとおほしめさるゝゆへなるへし
花の春のきんきよくはくはふうらくに
りうくわえんりうくはえんのうくひすは
おなしきよくのさえつり月のまへのしらへ
はよさむをつくる秋かせ雲ゐにわたれる
かりかねことちにおつるこゑ〳〵もなみた
の露の玉つさ玉さかに人はよもしらいとの
しらめをあらためて君きけや〳〵七せ
きのへいふうはおとらはこえつへしらこく
のたもとをもひかはなとかきれさらんほ
うしんはそんにえへりくんしんはせいしん
の御たすけとをしかへし〳〵二三へんひき

給ふをしくはうていはきこしめされしかと
もけいかしんふやうはいかてかこれをき、
わくへきたゝきさきのきんの音にき、
とれてたけき心をもうしなひてくはん
〳〵としてねふれるかことくなりみかと此
よし御らんしてかうせいゆうまうの御心を
おこして二人かひかへたる御衣の袖を引
きりつゝ七せきのへいふうをゆらりと
とひこえてんくはうのけきしるよそほひ
あられのしら玉万里おちてらんかんをはし
るこゝちしてあかゝねの御はしらにたち
かくれさせ給ひけりけいかおとろきいかり
をなしつゝもちたるつるきをなけかけ
奉るおりふしはんのいしかふたんといへる
ものくすりのふくろをなけかけたり
けれはつるきはふくろをなけかけら
れなから口六しやくのあかゝねのは
しらをなかははかりつらぬきける
あやうくあさましかりけること、も也

（挿絵第十一図）

それかうりうはしんえんのそこにあそへ
ともせんしよにいてぬれはかならすこう
きよのうれへにあふといへりしくはうてい
かたしけなくも十せん万せうのたつとき
御身をもつてへんちてきこくのけいしん
にちかつきすてに御身をあやふめんとし
給へるこそうたてけれさてけいかしんふや
うらをは官人ともすきまをあらせす
とりふせけれはくはうていみつから御つる
きをぬきけいかをもしんふやうをも
八さきにしてすて給へりそのゝちわうほん
といふしやうくんにす十万きのつはものを
あひそへえんのくにをせめさせらるえん
の宮こはけいしやうといふところなりいく
さやふれしかは太子丹はつゐにえんすい
と云所にしてうたれ給へり此時にあたつ
てきわうそわうかんわうてうわうせい
わうもみな一とうにせめほろほされて
天下一とうの御代となりしかは上下万
世をとなへけり

（挿絵第十二図）

さるほとにみかとは太さんにのほらせ給
てほうせんのまつりをゝこなひ給ふ千
万人のさいしやう官人みな〳〵くふし侍
れはいかめしきことなるへしみかとは山のた
かねよりはるかのかい上をてうはうし給へは

かい中にすこしき嶋のことくなるものろう
〳〵としてかすかにみえたりあれはいかなる
ものそととひ給ふに左右の大臣をはしめ
てけいしやう官人らあへてそれをしるもの
なかりけりしよふくといへるたうしかたはらに
侍しか御まへにす、み出てあれこそせん人
のすみ候なるほうらいはうちやうえんしう
といふ三つのしまにて候と申すみかと此
よしきこしめしほうらいの嶋にはふらうふ
しのくすりありといふはまことかと、はせた
まへはさん候かのしまにはふらうふしのくす
りをふくし候ゆへちやうせいをたもち候
と申すみかとの御心には一てん四かいの主
として万せうのほうゐをたもち給ふと
いへともとよりうたいの御身は御心にまか
せぬことをふかくなけかせ給ふなれはかの
くすりをえてちやうせい万せいをたも
たはやとおほしめしつ、やかてしよふく
をかの嶋につかはしてくすりをもとめさ
せらるへしと也ほうらいといふしまはむかし
よりをとにのみ聞ていまためにみたること
なししかれともありのま、にそうし奉り
ぬれは今た、とかく申ことはなくしてす
てにしよふくはほうらいのしまにおもむ
きけり是かためにれうとうけきしゆの
舟をつくりとうなんくはんちよとてとし
いまた十さいはかりなる男子女子をえらひ
〳〵て三千人舟にのせたりそのほかきん
〳〵しゆきよくさんかいのちんふつこく
とのくわしを山のことくにつみかさねたり
にしきのともつなをときかつらのかち
を立てしゆんふうにほをあけふなはた
をなんかいのにしにた、きつ、まん〳〵たる
うなはらにこきいてたり

（挿絵第十三図）

えんすいはう〳〵としてもとむるに所
なし風かう〳〵としてまなこをうかち
ぬれはほうらいをみすはあへてかへらし
といひしとうなんくはんちよもいたつら
に舟のうちにておいぬらんとそきこえ
ける

web公開に際し、画像は省略しました

（第一図）

（第二図）

web公開に際し、画像は省略しました

（第三図）

（第四図）

web公開に際し、画像は省略しました

（第五図）

（第六図）

web公開に際し、画像は省略しました

（第七図）

（第八図）

web公開に際し、画像は省略しました

（第九図）

（第十図）

web公開に際し、画像は省略しました

（第十一図）

（第十二図）

web公開に際し、画像は省略しました

（第十三図）